

多文化を背景に持つ高校生の学校適応に関する研究

一定時制高校を事例にー

高松美紀（東京学芸大学大学院）

1. 問題設定

ニューカマーや国際結婚の両親を持つなど、多文化を背景に持つ生徒（以下多文化生徒）は、日本語能力や教科学習、情報の不足が進学の障壁となり、入学しやすい定時制高校に進学する割合が高くなる傾向がある。しかし、入学後の実態に関しては十分明らかにされておらず、中途退学する生徒が少なくないという問題も指摘されている。

高校入試の階層構造において最底辺に位置づけられ、セーフティネットとしての役割と独自の学校文化を持つ定時制高校の特性は、多文化生徒の適応・不適応にどのように作用するのだろうか。また、彼らにとって高校に適応することが、将来を見通すことにどのように関係するのだろうか。

本研究の目的は、定時制高校が生徒に学校適応を促す営為の中で、その特性がどのように多文化生徒の適応・不適応の要因として影響し、彼らが将来を見通すことに作用するのかを明らかにすることである。

2. 先行研究

これまで多文化生徒の学校適応に関する先行研究は、日本語や教科の学習支援や母語・母文化の尊重（太田 2000）、日本の学校文化の同化、同質化圧力（恒吉 1995、志水 2000）、教師の「問題の個人化」（志水 2000）などから論じられてきた。

しかし、適応は趙（2010）が指摘するように、複数の要素が相互に関係し、多面的にとらえる必要がある。また、学業面では不適応だが人間関係で適応など、適応・不適応は併存し、環境の変化や本人の成長に伴って変化する。したがって、適応は、教員や研究者が外的に規定した「望ましい姿」になるのではなく、「個人が主観的に要求を充足しながら環境との調和を感じる状態」として、多面的かつ動的にとらえる必要がある。

また、環境としての学校の特性は「日本の学校文化」として一枚岩にとらえるのではなく、個々の学校の特性に着目する必要がある。特に高校では教育内容の違いや入学選抜による階層構造の影響を視野に入れる必要がある。「下位校」の生徒の学校適応について、荻谷（2001）は、反学校でありながら自己肯定感が強く、生徒が彼らなりの社会参加を遂げる実態を指摘した。林寄（2005）は、（生徒ー教員）の文化モデル（対立・休戦・融合）

を示した。しかし、定時制は生徒層が極めて多様で、学習意欲や行動様式が多極化する（平塚 2001）上に、反学校のまま学校適応させるしくみもあり、向学校ー反学校の構造ではとらえきれない。また、特に夜間定時制では学校外で過ごす時間と価値の比重が高く、それが学校への意味付与に影響を与えている（城所・酒井 2006）。

したがって、本研究では以下 2 点を研究の視点とする。①多文化生徒の適応を、本人が就学を意義あるものと見なしているか、生徒の主観から、背景も含めて多面的かつ動的にとらえる。②定時制高校の特性が、多文化生徒の学校適応の要因としてどのように働き、将来の見通しにどう作用するのか、他の日本人生徒との比較からとらえる。

3. 調査の対象と方法

調査対象校は、東京都立の定時制（夜間・学年制）A 高校である。A 高校は都心に位置し、部活動や生徒会活動にも積極的で、比較的落ち着いていると定評がある。入試が面接と作文中心であり、日本語取り出し授業などの言語支援、学校設定科目「多文化理解」「市民」の開講など、多文化生徒の受け入れや多文化理解に積極的であることから、近年とみに多文化生徒の数が増加している。

一方で、A 高校の多文化生徒は、多国籍でエスニシティ集団の規模が小さく、成人や発達障害を持つ者、不登校や退学経験を持つ者など、生徒層が「もともと多様」であるため、外国人/日本人の境界は強く固定されておらず、差異は多様で可変的である。また A 高校では、全日制とは異なる規律の緩さや教員とのフランクな関係など、定時制に特徴的な独特の指導文化、生徒文化がみられる。

調査方法は、A 高校におけるフィールドワーク及び生徒や教職員、校外の学習支援教室のスタッフに対する半構造的面接調査である。多文化生徒の背景や学校選択の過程、入学後の適応感や変化を聞き取り、一般生徒との差を検討した。調査者は、2009 年 4 月から日本語取り出し講師としてフィールドに入り、2010 年度以降は授業見学や補助として継続的に参与観察を行っている。

4. 調査の結果と分析

（1）A 高校の特性と多文化生徒の適応・不適応
調査の結果、A 高校の特性が多文化生徒の適応に

も不適応にも作用していることが明らかになった。

①差異の多様性、境界の曖昧性・流動性

A 高校において生徒間の差異は、(日本人/外国人)だけでなく、(障害者/健常者)(1年次4月入学/編入)など、多様な差異が関係性や場面ごとに浮き上がり、その境界は曖昧で流動的である。このことは、多文化生徒が日本人生徒と境界を引かれることで味わうマイノリティ感を減じ、適応要因となっている。その一方で、学習や進路選択上の困難や意欲の減退が気づかれにくく、不適応状態につながっている。

②集団主義的要素、同質化圧力の弱さ

A 高校では、夜間定時制の制度的制約と多様な生徒を受け入れるという配慮から、集団主義的要素や同質化圧力が弱い。このことは、日本の集団行動や画一的な指導になじめない生徒や、高校卒業資格のみ得たいという生徒には適応要因になる。しかし、関係性を求める生徒には日常的に機会が少なく、学習や進路の場面では刺激や情報の少なさにもつながる。定時制では生徒の背景や進路意識が個々に異なるため、周囲の動向が有効な判断材料になりにくい。多文化生徒の場合は、特に情報やネットワークに乏しく、現実や自分の能力を認識し、学習や将来の見通しを立てることが難しい可能性がある。

③指導の「ゆるさ」と学習の「やさしさ」

A 高校には、生徒と教員とのフランクな関係、緩い指導文化がある。教員は規範やタテマエで対応せず、「ずらし」ともいえる指導姿勢を取り、生徒と信頼関係を作りながら根気強く指導する教員文化があり、それを享受する生徒文化がある。このことは、躓いた経験を持つ生徒や学校に馴染めない生徒を学校適応に導き、再生の機会を与えている。しかし一方で、多文化生徒の中には、母国での学習経験から違和感を持ち、教員の優しさを歓迎しつつも、授業態度は厳しくして欲しいと思い、教員が発する暗黙のリソースや関係性を享受しにくい者もいる。

さらに A 高校では、取り組みやすい学習内容、無理のない卒業要件が生徒に提供される。このことは、学習に困難を抱える生徒や、就業で多忙な生徒には適応要因となる一方、「頑張らなくても進級や卒業ができる」という認識を持ち、入学条件の易さ、周囲の不真面目な生徒の態度と関連して、学校に対する否定的評価、消極的な授業態度への馴化、就学意欲の減退、というスパイラルを生じる生徒もいる。特に多文化生徒は、個人が自分のペースで学べるという定時制のスタイルとメリットを認識、利用することが難しく、戸惑いや不適応感につながりやすい。

(2) 学びを自分で調整することの困難さ

～ニューカマー生徒 T の事例

T の事例は、A 高校に馴化する一方で不適応に陥

り、学びを求めながらも就学意義を見失うという様相が顕著で、そこには多文化生徒の特徴もうかがえる。T は、ミャンマーから 15 歳で来日し、日本語能力と教科の学力、学校行事の回避を要素に A 高校を選択した。T は入学後不適応感を訴えていたが、部活に楽しみを見出し、友人も得、ある意味で A 高校に適応したといえる。しかし T は学習面において就学意義を見失う。T の消極的な授業態度や活動の不参加は、他の生徒の学習困難や逸脱行動の中で相対的に目立たず、T の学習遅滞は教員に意識されにくい。T は授業が十分に理解できていないにもかかわらず、「定時制はレベルが低い」「学校に行く意味がない」と言う。T は将来の見通しやそれにつながる学びを具体的に描けず、校外のリソースにもアクセスするが、情報や学びは断片的になって判断や調整ができにくい状態に陥っている。

5 結論

定時制 A 高校では、学校の特性や支援制度など、多文化生徒にとって適応しやすい条件が提供されている。しかし今回の調査で、特性が不適応にも作用する場合があるというジレンマが浮かび上がり、多文化生徒に特徴的な傾向も明らかになった。

多文化生徒は入学時点で高校選択の幅が狭いため、学校文化とのマッチングが難しい構造がある。さらに、自己の能力や定時制高校の教育資源に対する認識が難しいため、入学後に不適応に陥る過程において自己選択の実感が持ちにくく、自分で周囲の教育資源を統合しながら新たな道を模索すること、特に将来を見通し、自分の学びを位置づけることが困難な可能性がある。

しかし、多文化生徒の不適応は教員に認識されにくい。志水・清水(2001)は教員が問題を「個人化」して見ようとしにくい傾向を指摘したが、A 高校での特徴は、多文化生徒が低学力や不適応を表出し、学校も社会的な差異を前提に支援を提供しながら、周囲の学習困難や逸脱行動の中で多文化生徒の問題が相対的に目立たないことであり、また、多文化生徒自体が多様で他の生徒との境界が曖昧なため、問題や支援が焦点化しにくい。

定時制高校は様々な教育資源を提供し、「その気になれば」高等教育進学道も開ける。しかしその特性の中で、多文化生徒が学校に適応しながら将来の見通しを見失うという危うさも潜んでいる。

〈主な参考文献〉＊その他は当日資料参照

志水宏吉、清水睦美『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店 2001 年
趙衛国『中国系ニューカマー高校生の異文化適応』御茶の水書房 2010 年